

「ジャワ豹(1)」(2021年01月18日)



ジャワ島にジャワ豹 *Panthera pardus melas* がいる。世界には24種のヒョウがいて、インド・アフリカ・ロシア・中国などに独自の種が存在しており、ジャワ豹はかれらにくらべてユニークな存在と考えられている。というのは、ジ

ャワ島が大陸部から切り離されて島になったときにかれらはこのたいして広くない島に閉じ込められ、それ以降、そこでの状況に適応して独自の道を歩んだことが推測されるからだ。ジャワ島でジャワ豹の棲息領域は標高ゼロから1千メートルまでの陸地で、松林・チーク林・山岳部の自然林や森に棲み、2008年の国際自然保護連合データによれば総頭数は250を下回っている。しかしジャワ豹を州のシンボルにしている西ジャワ州天然資源保存館は、全ジャワ島に5百頭くらいはいるだろうと推測している。

ジャワ島内で特に西ジャワに多く見られるのは、西ジャワが山岳地帯であることに関係しているのではあるまいか。西ジャワでヒョウは昔、民衆に愛され尊敬された野獣だった。それは住民が作った田や畑を荒らすイノシシをヒョウが退治してくれたからだ。だが今やそのイノシシすら激減した環境でかれらが生き延びるためには、人間の生活領域に踏み込まざるを得なくなっている。飼育動物を盗んで食らうこの野獣はもはや住民にとっての害獣でしかない。

ジャワ豹は成長すると体長90から150センチ、体高60～95センチ、体重40～60キロになる。全身に茶色がかった黄色の斑点があつて、夜行性で木登りがうまく、また泳ぎも達者だ。寿命は平均して20年くらいであり、5～15キロ平米の行動範囲を持っている。

1910年代にバンドンの街中に迷い込んだヒョウがいて大騒ぎになり、ハンターが動員されて憐れなヒョウが始末された新聞記事がある。

住民が若い白人ハンターに出馬を要請したところ、そのハンターは「ひとりじゃだめだ。何人

かでやらなきゃ。」と言う。で、プリブミハンターにも誘いがかかり、ふたりのプリブミがやってきた。射手が三人そろったところで出動した。比較的中型のヒョウ一匹をしとめて獲物を役所に持ち込んだら記念写真となった。残されている写真はヒョウを前にして白ずくめの白人ハンターが中央、白装束でないプリブミハンターが両脇、その後方に数えきれないほどの民衆が写っている。

近年でも、憐れなヒョウたちは環境破壊が進む一方の山から人間の生活領域に下りて来るものが少なくない。2011年9月には、チクライ Cikurai 山麓のチラウの村に迷い込んで来た子供のヒョウが猟犬6頭と闘い、息絶え絶えになっているのを救われてガルツのチクンブラン動物園に收容された。猟犬5頭もそのとき深手を負っている。

体重25キロほどのその雌のヒョウは生後1年未満と見られ、授乳期を終えて独力で餌を獲るのを学習中の段階だったのではないかと動物園飼育係は述べている。しかしかれらの生活領域が狭まるにつれて、かれらのサバイバルは困難さを増しているのだ。雌が妊娠すると110日間くらいで2～6頭が生まれるが、生き残って大人になるのは1～2頭しかいない。また頭数が減って来れば近親婚の傾向が高まり、劣弱な個体の懸念が高まる。

そのときの新聞記事には、ジャワ豹はジャワ島のあちこちの国立公園に棲息していて、個体数は491～546頭と推測され、森林総面積から一頭当たりの棲息密度を割り出すと6～7平方キロにしかならず、スリランカの20～30平方キロに比べてジャワ豹がいかに悪条件の渦中に追い込まれているかということが記されていた。

山の奥深くに隠れて生活することを好むジャワ豹も、水や食料を得るために安全な生活領域を越えることが起こる。かれらの安全領域の外は人間が支配している場所であり、そこには食料や水もあるが危険も同居している。[続く]

「ジャワ豹(2)」(2021年01月19日)

人間は隠れ住んでいるかれらを探してまで危害を加えようとはしないものの、かれらに家畜のヤギやニワトリを食われたら報復の拳に出る。殺すか、あるいは小さければ捕獲して飼う。

被害を受けた住民はそれが自分の権利だと考えるのだ。だからヒョウを山から下りて来させないようにするための知恵を動物園側は住民に指導している。

そのひとつはトラの糞をヒョウの通り道に撒くことだそうだ。そうするとかれらは自分より強い大型獣を怖れて下りて来なくなる。しかしもっと根本的な問題として、住民にヒョウの食料になるイノシシ・オナガザル・ヤマアラシなどの捕獲をやめるよう指導している。いくらヒョウを怖がらせても、空腹をいつまでも我慢させることは無理だからだ。

2012年にもヒョウが山から下りて来た。クニガン県カラパグヌンで10月17日、チルマイ Ciremai の森林からおよそ10キロ離れた住民部落で鶏小屋を襲って食べていたヒョウを部落民が捕まえてチクンプラン動物園に提出した。このヒョウはおよそ3歳で、体長2メートル、体重60キロの大型のものだった。

乾季が長引くと、森林の中の水や餌になる食べ物が減少し、ヒョウは往々にして人家のある場所へやってくる。続いて11月6日にはチアミス県チトゥンク部落で、住民が飼っているヤギを捕食していたヒョウが部落民たちに殺される事件が起こった。この死んだヒョウも年齢3歳くらいで体長は1.5メートルだった。

この事件は部落民もヒョウも互いに相手を怖がり、歯向かう野獣に人間側が集団で過剰な行動を取ったために起こった悲惨な結末だったことから、天然資源保存館は部落民に適切な対処方法の指導を与えている。

ヒョウはたいていが兄弟姉妹を持っていて、中の一頭が戻って来ないとそれを探しにやってくるため、近いうちにまたヒョウがやってくる可能性が高いとのことだ。

2013年にもヒョウと人間のコンフリクトが起こった。中部ジャワ州チラチャップ県クタアゲン村で9月28日、森から出て来たヒョウが部落から5百メートルほど離れた場所に仕掛けられたイノシシ用の罠にかかっているのが発見された。乾季で森の中の水が干上がったために安全圏から外に出たと見られている。

住民は畑を荒らしに来るイノシシを捕まえるために数カ所に罠をしかけており、ヒョウはそのひとつに掛かってしまった。5歳くらいと見られるこのヒョウはバンジャルヌガラ県スルリンマス

動物園に收容された。だが罠にかかったときに腹に深い損傷を受け、最終的に動物園で死亡した。

西ジャワ州チアミス県では、山から出て来たヒョウを捕獲して殺し、肉を食べ、皮をはいで売ろうとしていた住民が逮捕されている。また東ジャワでもスメル Semeru 山系の中で人間の生活領域に進入したヒョウを警官が銃撃して殺す事件が起こった。警察側はその行動について、保安のためだったと釈明している。

10月には西ジャワ州スカブミ県ギリムッティ村で、住民の飼っていた羊4頭が食い殺されているのを朝起きた住民が見つけて届け出た。その事件の一週間ほど前にヒョウがかなり離れた別の場所で捕獲されており、別のヒョウのしわざであることは明白だ。

天然資源保存館は、ギリムッティ村に近い山岳森林地区には4～5頭のヒョウが住んでいると推測している。しかし企業や住民による茶農園やゴム農園の開墾、あるいは近隣住民による耕作地化のためにヒョウが人間に近づく機会が増加している。中でも、人間が作る畑を狙ってイノシシがやってくると、そのイノシシを捕食しようとヒョウがその後を追ってやって来るのである。そうなれば、畑を作ったらイノシシの心配だけしていればよいということにならない。[続く]

「ジャワ豹(3)」(2021年01月20日)

ギリムッティ村を騒がせたこのヒョウは最終的に住民に捕獲されて、チサルアのタマンサファリインドネシアに收容された。年齢7～8歳、体重50キロの大物で、ジャンパンという名前を与えられた。

このジャンパンは人間の生活領域と森林とを結ぶ踏み分け道からおよそ百メートルほど離れた地区に棲んでいたようで、人間の姿を見慣れているらしく、人間が近寄ってもあまり興奮しない。他のヒョウなら人間に対して頻りに牙をむくのに、ジャンパンはいささかのんびりと構えている。捕まるまで、ジャンパンは牛・ヤギから犬まで飼育動物を獲物にしていたらしい。

一方、同じ月に中部ジャワ州ジュパラ県クリン郡トゥンプル村ドゥプラッ部落に夜間、ヒョウが

侵入し、鶏小屋を襲って鶏を食った事件が報告された。現場を見た者はいなかったが、ムリア山系自然林と部落の間の道にヒョウの足跡や排泄物があるのを部落民は見つけており、その推測は間違いがないようだ。

2011年からそれまでにこの村にヒョウが侵入した事件は6回起こり、鶏・家鴨・ヤギなどの家畜が多数、ヒョウの餌食になった。中部ジャワ州天然資源保存館長は、ムリア山系に棲息するヒョウは成長すると、親の生活領域から離れて自分の縄張りを作らなければならず、人間が自然林を開墾して農園や畑を作るために自然林が狭まり、必然的にヒョウが人間の生活領域に侵入することが起こる、と語っている。

クドウス・ジュパラ・パティの三県にまたがっているムリア山系に棲息しているジャワ豹の調査が行われたが、野生動物監視カメラには一匹も捕捉されなかった。だがかれらの通り道には足跡や糞が見つかっていて、かれらの存在を疑う者はひとりもない。ましてや山岳自然林に接している部落にはかれらの侵入した証拠がいくらかも上がっているため、かれらの全貌をつかもうと当局側は躍起になっている。ここの自然林にはキジャンがいて、キジャンもヒョウの餌食になっているとのことだ。

2014年6月には、再びチラチャップ県クタアゲン村で、鶏小屋を襲ったヒョウが小屋から出られなくなるという事件が起こった。早朝にそれを見つけた住民が警察に報告し、警察から天然資源保存館に報告が入って、ヒョウ捕獲隊の出動となった。

チラチャップ県でのヒョウ侵入事件はこれで過去十二か月間に四回発生している。人間の生活領域に入って来るヒョウは若年のものが多い、かれらにとって安全な森林の中での縄張りはどうしても成熟したヒョウが先取るから、若い者は食料を得るために危険を冒さなければ仕方なくなる。

中部ジャワ州北部地域と同様に南部地域も監視カメラを使った野生動物調査が行われ、こちらの方はかなり多くの情報が手に入った。ヌサカンバガン島だけでも18頭のヒョウが棲息しているようだ。

西ジャワ州でも国立公園内での監視カメラによる調査が行われている。2014年前半の調査で、ハリムンサラツ Halimun Salak 山国立公園内の野生動物の中にしばしばジャワ豹の姿が出現した。

同公園管理館は、棲息しているジャワ豹の総頭数は2013年が16頭と推定されたが、2014年は18頭に増加していることを報告した。ヒョウは公園内でキジャン kijan・カンチル kancil・ルトウン lutungなどを捕食している。[続く]

「ジャワ豹(終)」(2021年01月21日)

ジャワ島にジャワ豹のための安全な生活領域を用意してやることはもはや至難の業になっている。動物保護林や国立公園は十分な広さを持っておらず、ヒョウ同士の縄張り分割にあぶれた者は人間との競合に向かわざるを得ない。ましてや、保護林や国立公園ですら人間の活動が行われる場所が増えており、ヒョウの生活領域は細分化される方向に向かっている。ヒョウの家族は狭いテリトリーで少ない餌を狩り、成熟した子供たちは近親婚に向かう。

ジャワ豹がジャワ虎の後を追って絶滅に向かうシナリオはすでに描かれていると言っても過言であるまい。自然保護関係者は細分化されつつある生活領域を繋ぎ合わせてより広い行動領域を与えるための通路を用意するよう提言しているのだが、人間が自己繁栄を目指す経済活動を抑制して野獣のための犠牲をいとわないようになれるのはいつの日のことだろうか。

ところで、ジャワ豹はインドネシア語で macan tutul Jawa と呼ばれている。macan はジャワ語で虎を意味し、tutul もジャワ語で斑点を意味する。ムラユ語では、虎は harimau で、インドネシア人の言う macan tutul はマレーシア語で harimau bintang に該当する。

このジャワ豹の中に黒豹 *Panthera pardus sondaica* がいる。インドネシア語で黒豹が macan kumbang と呼ばれるのは、kumbang という言葉が甲虫類を指していて、黒光りする外殻のイメージをヒョウに当てはめたのが語源だそうだ。

黒豹も斑点豹と同じように、山から下りて来ることがある。1999年10月にはタマンサファリインドネシアが設けた畏檻に近寄って檻を出入りした黒豹の姿が監視カメラに収録された。檻の扉が降りなかったので、黒豹は無事にまた檻の中に姿を消している。その前夜には斑点豹が同じ畏にかかった。

タマンサファリは動物のための食糧も豊富なら、肉食獣の食料になる弱小動物もたくさんいて、この招かれざる客が夜中にしばしば徘徊することがある。園内で飼育されているワニのための食糧として飼われている鶏がむさぼり食われたこともあるし、飼育動物のワラビーまでが餌食にされた。

2003年にはスカブミ県天然資源保存館チクプ動物保護地区分室が、同保護地区の黒豹と野牛 banteng が絶滅したおそれが高いとの推測を発表した。過去二年間、その姿や足跡を見た人間がひとりもないとのことだった。

チクプ地区では、1970年代末に野牛は3百頭いて、保護地区内を集団で移動していた。1985年にはそれが43から139頭の間まで減少し、その後なされた調査で25～65頭になっていた。しかし分室員が行う地区内の巡回観察でここ数年間、動物本体はもとより、足跡や排泄物すら発見されていない。黒豹も似たような状況だったようだ。

[完]

「伝説のジャワ虎(1)」(2021年01月25日)



ジャワ虎

スマトラ島にスマトラ虎がいるように、ジャワ島にジャワ虎がおり、バリ島にバリ虎がいる。いや、ジャワとバリのトラは既に絶滅宣言が出されているから、いたと言わなければなるまい。それらのすべては地元原生種とされていて、学名が違っている。スマトラ虎は *Panthera tigris sumatrae*、ジャワ虎は

Panthera tigris sondaicus、バリ虎は *Panthera tigris balica* だ。しかしそれらの個別名称については、2017年に国際専門家グループがそれら三種を *Panthera tigris sondaica* に統一している。



バリ虎

バリ虎がその三種の中でもっとも小型だった。肉食獣が狩る獲物が小型であれば、肉食獣自身も小型になるという理論がある。小さなバリ島で暮らしてきたバリ虎は、体躯が巨大化するほどの食料も生活領域も得られず、小型

の獲物を狩ってほそぼそと生きていた様子を感じさせてくれる。

その結果、頭数の増加もほとんど起こらず、ハンターに狩られるのにまかせて絶滅の急坂を転げ落ちて行ったのではあるまいか。

トラはバリ語でサモン *samong* と呼ばれた。最後のサモンが西バリ地区にあるスンバルキマ *Sumbar Kima* の原野で1925年にハンターに狩られ、それが絶滅の吊鐘になったようだ。公式絶滅宣言が出されたのは1937年9月27日だった。

ジャワ虎は他の世界中のトラに比べて身体が小型であり、多分バリ虎に次ぐものだったのだろう。スマトラ虎の方がジャワ虎より大きいのは、生活領域の広さに関係しているのではあるまいか。

1966年9月15日付けのコンパス紙第一面にトラの話が掲載された。中部ジャワ州クンダル Kendal 県ボジャ Boja 郡レジョウィナグン Rejowinangun のコーヒー園で、コーヒーの実を盗む泥棒の被害を防ぐためにトラに番をさせる計画があるという話だ。そこで語られているトラとはジャワ虎とジャワ豹を指している。インドネシア語ではどちらも harimau や macan が使われるためだ。

虎も豹も調教のなされた者であり、夜間だけ総面積454Haのレジョウィナグンコーヒー園に放される。経営者はこの計画について「人間が夜警を行っているかぎり、賄賂に吞まれる可能性があるが、トラの夜警であれば……」とコメントした。かれはそのあと、何を言おうとしたのか？ はたして、「泥棒のほうトラに吞まれる」と言いたかったのかどうか？

1966年11月7日のコンパス紙第二面には、またトラの話題が登場している。1963～67年の任期を務めた東ジャワ州知事が東ジャワの外貨獲得潜在性調査に訪れた国会D委員会にこんなことを物語った。「カラパンサピ Karapan sapi は絶好の観光資源だ。その競技で競い合う牛を興奮させる妙薬がトラの小便だ。トラの小便で競技はすさまじいものになる。必ずや観光の目玉になるだろう。」

1960年代のジャワ島でジャワ虎はまだ保護の対象になっておらず、民衆は狩猟対象という位置付けでジャワ虎を見ていた。1966年のコンパス紙に狩られたジャワ虎の写真が掲載されている。バニュワギ県グレンモル Glenmore の農園地帯で猟師に撃たれて死んだトラが長い木の棒に両足を縛られて担がれている姿がそれだ。周りにいる人間と大きさがあまり違わないので、成長しきっていないトラだったのかもしれない。当時、グレンモル地区にはその世界で名の知れた腕利きの鉄砲猟師が十数人住んでいた。[続く]

「伝説のジャワ虎(2)」(2021年01月26日)

1982年1月14日午前10時ごろ、中部ジャワ州クラテンの町にトラが出現した。町中のラジオテレビ店「パラパ」の北側をゆうゆうと一頭のトラが徘徊している。外に出ている住民の間でパニックが起こった。恐怖と戦慄で我を忘れた民衆がてんでに駆けだし、人間同士の激しい衝突さえ発生した。その騒ぎに惹かれて「なにごとか？」と何も知らない住民が集まって来たのはいいが、トラが原因だと知ってかれらも慌てて駆けだした。

現場に近い警察官詰所の警官がすぐに状況把握に乗り出し、そのトラはクラテンの町に来て興行しているサーカス団「オリエンタルサーカス」のものであることが判明した。サーカス団調教師が連れて来られ、この「トラが町へやってきた」の騒ぎも終了した。そのトラは檻から逃げ出したあと、クラテン市チュンパカ通りの住民ソアンダ氏の犬を食っていたことが判明した。この事件のおかげでサーカスの興行はきっと大入り満員になったことだろう。このニュースは1982年1月19日付けコンパス紙の第12面を飾った。

さて、このジャワ虎の最期はもっと最近のことだった。ジャワ島東端に位置するバニユワギ Banyuwangi 県のメルブティリ Meru Betiri 国立公園で、1976年には3頭のジャワ虎が棲息していると報告されていたが、その後トラの存在を証明するものが全く見つからなくなった。1983年と1997年に行われた調査でも、何も発見されていない。

メルブティリ国立公園管理館は2007年にトラのハビタットに監視カメラを設置して監視活動を続けているが、トラの姿がカメラに入ったことは一度もない。調査員が公園内の探査を行ったとき、地元民の中にトラを見たと言う者が現れたものの、その話を実証できるものが何もない。足跡や爪痕が見つかって、ヒョウなどのトラより小型の野獣のものばかりだ。IUCNの定義によれば、20年間その動物の存在を立証できるサインがまったく見つからないときに、絶滅したと言うことができる。

中部ジャワ州スラムツ Selamet 山で1979年にトラが3頭いることが報告された。スハルト大統領は俄然ジャワ虎の保護を叫んだ。ところが検討した末に、5千人の農園労働者の居所と

職場を山から離れた場所に移さなければならないという結論が出て、たった3頭のトラのために不釣り合いな経済負担が国家経済に生じることを嫌った政界経済界が猛反対し、大統領の叫びはこだまも生まずに真空の中に吸い込まれて行った。スラムツ山からもトラの姿が消えた。

こうして1980年代に政府はジャワ虎絶滅の公式宣言を出した。だがジャワ島の中に「ジャワ虎はまだ生きている」という信念が消えることなくいまだに漂っているのである。宣言後も、民衆からの「トラを見た。」「トラの足跡だ。」「トラの糞だ。」「トラの爪痕だ。」という届け出は絶えたことがない。トラの足跡や糞と言っているものを専門家が調べると、ヒョウもしくは他の動物のものという判定が下される。[続く]

「伝説のジャワ虎(3)」(2021年01月27日)

2002年7月には、ヨグヤ特別州グヌンキドウル県プラワン Pelawan 洞窟の壁に残された野獣の爪痕が発見され、トラではないかとの期待が盛り上がったが、確定できないままになっている。

西ジャワ州チクライ Cikurai 山腹にテレビ電波中継塔が建てられており、その辺りは深い森林になっている。山麓住民はしばしば、夜になるとその一帯にトラがもっと上の方から下りて来ると語っている。ガルツ県パムンプツにあるサンチャン Sancang の森周辺住民も、神秘的能力を持つトラの話をし、トラは今でも下界に下りて来ると語る。

毛が見つければ好都合なのだそうだ。DNA検査で科学的に立証できるのだから。だが、絶滅宣言後にもたらされた情報の中で、ジャワ虎の存在を証明できる科学的な証拠はいまだに得られたことがない。ところがインドネシア科学院LIPIの動物学専門家は、それらの情報の中に正しいものが必ず混じっていると考えている。かれはジャワ虎民間愛好者が結成したジャワ虎保護民間グループを指導しており、そのグループが収集した諸情報の中にジャワ虎がまだ生き残っていることを確信させるものが混じっていると見ているのである。

1995年と1996年に殺されたトラの皮の切れ端が中部ジャワで入手されている。また東ジャワで1996年に殺された若いトラの歯が手に入った。メルブティリ国立公園内で1997年にトラの足跡と毛が見つかり、2004年には排泄物と爪痕が見つかった。爪の間隔が4センチ

を越えているその爪痕と類似のものが東ジャワのラウン Raung 山と中部ジャワのスラムツ山で1999年に見つかっている。2000年に東ジャワのアラスプルウォ Alas Purwo 国立公園で発見されたトラの毛はLIPIの検査機関によって真正のトラであると判定されている。2004年にメルブティリで発見されたトラの毛も検査結果が真正のトラであることを示している。

1998年にはメルブティリで殺されたトラが7百万ルピアで売りに出ている情報が得られており、また2004年には生け捕られたトラの子供が生きたまま売りに出されている情報も手に入った。そして、トラ捕獲の闇仕事を行っている人間が「数千万ルピアでトラを持ってきてやる」と保護グループのひとりに語っている。

「絶滅したと宣言されたために、まだ存在している者が自由に狩られることになった。絶滅した者に法的規制がかけられないからだ。絶滅宣言が出されたために残った者が本当に絶滅に向かうのなら、こんな皮肉なことはない。関係者が力を合わせて調査を行えば、ジャワ虎の真の姿が明らかになり、保護の方法が見つかるはずだ。」ジャワ虎保護民間グループのひとりはそのように語っている。このグループは公的な資金援助や学識の支援などなしに、ジャワ虎の保護を目指してすべて自力で活動を行っている。LIPI専門家も個人としてそこに参加しているにすぎない。

昔からジャワ島でトラ狩りはゲームとしても行われたが、治安維持を目的にしても行われた。1872年にトゥガル Tegal でトラの首にひとつ3千フルデンの賞金がかけられたことがある。そのときは十数頭のトラが狩られたようだ。

トラが人間を襲う事件は頻繁に起こった。「サイジャとアディンダ」の物語にも子供のサイジャがトラに襲われるシーンがある。人間社会の安全を優先しようとするとき、トラ狩りは当然の帰結になった。だが農民がトラを害獣視したかというそうでもなく、田畑を荒らしにやってくるイノシシを退治してくれるために、農民社会にはトラへの恐れと敬意が同居していた。[続く]

「伝説のジャワ虎(終)」(2021年01月28日)

地方伝統芸能として有名なレオツ reog で人間がかぶるシゴバロン singobarong はトラの頭で

飾られる。レデブールという名のハンターは1910年から40年までの間にトラを100頭しとめたと語っている。1930年にはトラ狩りプロモーションが行われてジャワ虎の数を大幅に減少させた。1940年に西ジャワの南部と北部の山岳部でトラ狩りが盛んに行われて、ジャワ虎は絶滅に向かった。

それ以前にジャワ島の至るところに棲息していたジャワ虎は、植民地時代末期のそのころでさえすでにウジュンクロン Ujung Kulon、ルウンサンチャン Leuweung Sancang、バルラン Baluran、メルブティリ Meru Betiri にしかいないというのが一般常識になっていた。

ジャワ虎はまた、生命をかけて闘う勝負の代表選手にされた。トラ対トラ、トラ対野牛、トラ対人間。人間の場合は戦闘士もあれば犯罪者もいた。犯罪者の場合は処刑ということだ。闘技場は槍を持った兵士でアリの這いでる隙もなく囲まれ、トラが相手を倒して逃げようとする銃ぶすまが待ち構えていた。トラの爪にかけられて生命を落とす兵士があっても、兵隊は消耗品なのだ。マタラム王国では、このトラ試合のために年間百頭のトラが死んだと見られている。

トラ対野牛には政治的意味が付加された。野牛がプリブミであり、トラはオランダ人という想定が行われ、野牛が勝つと闘技場内に歓呼の声が轟き、トラが勝つと、トラの全身に槍が突き立てられた。

ファン・デン・ボシュ総督の栽培制度開始以来、ジャワ島内の森林開発に拍車がかかり、商品作物栽培のために森林が切り拓かれて農園にされた。それはジャワ虎の安全な生活領域を人間が削り取って行くことでもあったのだ。その開拓期にブルブス Brebes やバニユマス Banyumas では年間に数百頭ものトラが狩られている。

インドネシア共和国の独立維持闘争期には、オランダに武力反抗するインドネシア人が町を捨てて山岳森林部に隠れた。更に山岳森林部の辺縁地区が開墾されて農園や畑が作られた。ジャワ虎の安全な生活領域が急激に減少したことは疑いあるまい。

人間の領域が拡大したことは、トラのみならず鹿の生活領域をも脅かすことになった。鹿が減れば、トラの食料も減るのである。狩猟・食糧不足・生活領域の減少・炭疽症の病気などがジャワ虎絶滅の原因であると言われている。

ジャワ虎実在の証拠を求めて暇があれば山野を渉獵しているジャワ虎保護民間グループメンバーのひとり、山岳森林地区の探査を行うときに、頻りに森林周辺に住む地元民とのコ

ンタクトが起こる、と語る。

地元民が持っている情報がその地区の探査で重要な意味を持つからだ。そのときに、地元民のトラに対する気持ちが露にされる。「かれらはトラを自分たちのパートナーと見なしています。畑を荒らしに来る動物を怖がらせようとして、トラの像を作って畑に置いているんですよ。かれらは自分たちとトラがひとつの関係の中で結ばれているように感じています。トラを殺すのは、そういう感情を持っていない外部者たちです。」

人間は強い者に対して、無条件で憧憬を抱き、尊敬の念を持つ。ジャワ島最強の野獣だったジャワ虎への畏敬を農民が感じるのは多分自然なことなのだろう。だが地上最強の人間が驕りを持てば、畏敬の念はけし飛んでしまうかもしれない。今起こっていることは、ひょっとしたらそれなのではあるまいか。[完]

「スマトラトラ(1)」(2021年02月01日)



世界のトラは百年前に10万頭いたが、今では5～7千頭に減少した。絶滅が懸念されている動物のひとつだ。絶滅に向かっている原因のひとつは密猟つまり不法狩猟で、その目的は皮や骨を入手することにある。皮は一枚が1.5万米ドル、アジア

で伝統医薬に用いられる骨は2.5万米ドルで売れる。

既に絶滅したトラは3亜種あって、バリ虎が1937年、カスピ虎が1970年代、ジャワ虎が1980年代となっている。残っている亜種はシベリア虎・アモイ虎・インドシナ虎・マレー虎・ベンガル虎・スマトラ虎で、次の絶滅候補がアモイ虎だそうだ。

2010年の干支はトラだった。トラは中国で百獣の王とされ、白虎は西方を守護し秋を統御する。青龍は東を守護して春を統御する。亀は北を守護して冬を統御し、南は鳳が黄龍と共に守護して夏を統御する。中国でトラはそれらの者たちと共に四霊のひとつに取り上げられているのだ。インドでトラはドゥルガ女神の乗り物になっている。

2010年2月13日のコンパス紙にトラの話が出ており、トラ絶滅への元凶が列挙されていた。筆頭に欧米が挙げられていたのは誰の見解なのだろうか？

米国で飼われているトラの数はアジアの野生トラより多い。トラの身体の解体パーツが闇市場で売買されているのを規制する法律が米国にはない。

ヨーロッパは化粧品・バイオ燃料・洗剤などの原料にするため、各国がこぞってパーム油を買い漁っている。そのためにインドネシアやマレーシアでは森林が開墾されてパームヤシ農園にされ、トラの棲息領域が急速に減少している。

ネパールはトラの皮と骨の闇ビジネスの交差点になっていて、ルートは中国にまで伸びている。

インドではトラの棲息領域が減少しているために人間とトラのコンフリクトの発生頻度が増加している。

バングラデシュではトラのハビタットであるスダルバンのマングローブ林が海面上昇で縮小しているため、野生トラは数パーセントにまで減ってしまうことが懸念されている。ロシアでは朝鮮に送るために針葉樹林が伐採されていて、アムールトラはハビタットを失いつつある。

マレーシアとインドネシアでは森林開発がトラの生活領域を狭めている。

ベトナムでは闇売買されているトラの解体パーツの発見が増加している。大型冷凍庫の中にトラの死骸が2頭吊り下げられているのが見つかった。

中国・カンボジャ・ラオス・ミャンマー・タイ・ベトナムが共同で行っているメコン川流域開発プロジェクトはトラの生活領域を分断してしまうことになる。

中国では、伝統医薬の材料としてトラの解体パーツの需要は昔から相変わらずの隆盛を維持している。

というのがトラ絶滅の背中を押している状況だそうだ。

スマトラでは1969年にスマトラトラ15頭が狩られた。価格は、まだ新しいうちは一頭が2～3万ルピアだった。当時の対米ドル交換レートは250ルピアだ。ブンクル州のルジャンルボン Rejang Lebong 地区がさまざまな野生動物の宝庫になっていて、トラ・象・ヒョウ・野生の水牛・オランウタン・キジャン・カンチルなどが棲息している。イノシシが人間居住エリアの耕作地を荒らすためにイノシシ狩りがときどき行われるのだが、イノシシ猟師たちがトラ狩りを行うこともあった。[続く]

「スマトラトラ(2)」(2021年02月02日)

1975年にWWFが調査を行い、年間に100頭が狩られているとの推定を行った。生き残っているのは8百頭ほどで、その半分くらいが中部スマトラにおり、自然保護地区にはあまりいない、との結論が出されている。地元民や外来者による狩猟とトラ皮が高価であることがトラを絶滅への道にひた走らせているというのがコメントだった。

1975年6月16日付けコンパス紙の広告欄に出された広告はこうなっていた。「トラ売りま

す。当方愛玩コレクション。剥製・傷なし・勇壮・魅力的。価格120万ルピア」当時の対米ドル交換レートは415ルピア。

1978年の調査では、スマトラトラは全島に1千頭いると推定されたが、1992年には4～5百頭に半減した。

ムラユの密林の王、最強の野獣ハリマオは1997年以来、破壊の進行する密林近くの部落に姿を見せるようになった。そうしていくつかの部落でトラの被害が出始めた。家畜ばかりか人間もその餌食になり、噂では三十数人が人食いトラに生命を奪われたという話まで出た。人食いトラの実態調査を進めていたリアウ州天然資源保存館はドゥマイ市とロカンヒルル県でトラの被害を受けた部落を軒並み当たり、2002年7月から9月までの三カ月間に発生したトラによる死亡事件の被害者は5人という結論を出した。しかし、その被害を生んだトラが何頭だったのかはわからない。

その調査結果によれば、2002年7月に畑仕事をしていた男性ひとりがトラに襲われた。被害者はドゥマイの病院に緊急輸送され、二日間もつたが三日目に死亡した。8月1日、マングローブ林で木炭の材料のための木を集めていた作業者が二人目の犠牲者になった。

8月3日23時ごろ、40歳の主婦が家の裏で襲われ、飼い犬も犠牲になった。トラは主婦の遺体を15メートル引きずって運んでいる。8月5日午前5時半ごろ、ジャワ出身のアチェからの避難民である35歳の男性が家の裏の井戸でウドゥを行っていたところをトラに襲われた。被害者はそこから130メートルほど離れた場所で見つかった。トラが遺体を引きずって行ったのだ。更に9月には三人の男性が襲われ、二人は死亡しもう一人は重傷を負って病院に運ばれた。

その一連の事件で部落民の恐怖とトラへの恨み、そして復讐心が心の奥底にしみこんで行ったことは疑いあるまい。ひとびとが犯行者を殺してその肉を食らおうと決意したとしても不思議はないだろう。こうして2002年8月27日午前6時半ごろ、恐れていたことが起こったのである。

ドゥマイ市スガイスンビラン郡バシランバル町パンタンムンドゥル部落の高床式民家の床下に若いトラがいるのを住民が見つけた。トラは床下から脱け出せなくなっていたのだ。人食いトラの恐怖で肝を冷やし続けていた住民たちは、この若いトラを捕らえて腹いせを行った。寄っ

てたかって虐殺したのである。部落民の勝利の祝宴でトラの肉はかれらの胃におさまり、ヒゲ・歯その他の解体パーツはお守りや万能薬として部落民が持ち帰った。

この推移に天然資源保存館は人食いトラを早急に捕獲する必要に迫られ、ボゴールのサファリパークインドネシアにいる専門家を加えたタスクフォースを編成して対応に乗り出した。スマトラのトラが棲息している地方の州庁には、トラの罠を作り、麻酔を施し、トラを取り扱うといったことに関する十分な技術を持つ職員がいないために、外部から専門家を招かなければならない。

このチームは三カ所に木製の罠をしかけたが、ほぼひと月間成果は何もなく、サファリパークの専門家が仕方なくボゴールに帰ろうとしていたとき、罠にかかったとのニュースが入った。

[続く]

「スマトラトラ(3)」(2021年02月03日)

チームが現場に着くと、7歳くらいの大型トラが罠にかかってたけり狂っている。10月4日午前6時ごろ罠にかかったそのトラは体長180cm、体重110kgもある巨大なもので、現場には百人を超える地元民が集まっていた。チームはトラに麻酔をかけるのを見合わせた。トラが力を失ったときに地元民が復讐行動を開始すると收拾がつかなくなるからだ。

罠から檻に移すとき、地元民がトラの見える檻を望んだために、チームはトラを鉄格子の檻に移した。ところがトラが近寄って来た見物人を威嚇したとき、顔面を格子に強くぶつけたために怪我をしてしまった。トラは最終的に保護されてスマトラトラ飼育場で30頭ほどの仲間と共に暮らしている。

コンパス紙は5人を殺して肉を食ったトラを man eater と呼んだ。この呼称はインドのベンガルトラにイギリス人が与えたもので、バングラデシュとの国境地帯にあるインドのサンダラン地方に棲息するトラのどう猛さをシンボライズする言葉になった。

インドでマンイーターは毎年60~120人の人間を殺している。その地方には4百頭ほどの野生マンイーターが棲んでいるが、森林破壊等で生活領域の縮小が進んでいて、おまけに人

間がトラの食料である鹿やイノシシなどを狩るために、トラの生存は脅かされる一方だ。腹をすかしたトラは森林を出て近くの間生活領域に侵入する。人間の家畜がまず餌食にされ、居合わせた人間も犠牲になる。一度人間を食ったトラは人間狩りに向かう傾向を持つので、人間に対する襲撃を繰り返すようになると地元民は述べている。

人間の犠牲が回数を重ね、中にはあらかた身体を食われる人間が出てくれば、地元部落民はもう黙っていられない。部落民は行政にマンイーター粛清の許可を求めるのである。つまり自分たちの手でトラを射殺するのだ。

30年くらい前にマンイーターの研究が進められ、その中には、トラが人間を殺しても、すべてのケースで肉を食べているわけでないことが明らかにされた。更に、一度柔らかい人肉の味をしめたために人肉嗜好が起こって人間を襲い続けるようになるという説が妥当なものでないことも判明した。また別に、人間を襲うトラは老齢のヨボヨボトラで、他の獲物の逃げ足が速いために追いつけず、捕まえやすい人間しか追いつける獲物がないからだ、という説も根拠のないものだったことが分かった。

トラに襲われた事件についての聞き取りを含めた調査研究によれば、トラが人間を襲ったケースの中に次のようなものもあった。トラが家畜を捕食しているのを人間が見つけ、パニックになったトラが人間を襲って鋭い爪を持つ強力な前脚と牙で引き裂き、殺したケース。あるいは洞窟で子供に授乳中の母トラが子供を保護したい一心で、洞窟に近付いてきた人間を襲ったケース。また面白い実例として、夜中に焚火の傍で座っている人間ばかりを襲ったトラのケース。ひょっとしたら、そのトラは森林火災の犠牲者で、火に対する強いトラウマを抱いていたのかもしれない。また、狂犬病にかかって精神異常になったキチガイトラの例もある。このトラは襲った人間をボロボロになるまでむしり続けたそうだ。

インド政府は地元民に対していくつかのトラ対策を指導した。たとえば森林近くを徒歩で移動するさい、大勢が連れ立って、にぎやかに集団で通過するように。あるいは畑仕事に向かうさい、仮面を後頭部にかぶるように。そうするとトラは人間があとずさりしながら離れて行くように思い、後ろから襲い掛かって来ないのだそうだ。[続く]

「スマトラトラ(4)」(2021年02月04日)

リアウのマニーターに関して、その捕獲を手伝ったサファリパークインドネシアの専門家は、事件の原因をたどって行くなら、人間の行為が根底にある、と語る。人間の行ってきた森林開発や伐採、あるいはトラの食料である鹿・イノシシ・サルなどの狩猟がトラの生存を困難にしている。トラは本来、人間を恐れるために森林の奥深い自分の生活領域から出て来ようとはしない。だがそこで暮らせなくなったら生存のために人間の生活領域で狩りをせざるをえない。そこには牛羊鶏などの家畜がいるのだから。そのときに人間が居合わせれば襲われることも起こる。

このリアウでの事件についてかれは、5人の人間が襲われてトラに食われた者もあり、また部落民が別のトラを捕まえて食ったことについても、だれが良い悪いということではなく、すべてが不幸な事件だったとコメントしている。

2003年、リアウ州天然資源保存館はドゥマイ市とロカンヒルル県周辺に棲息している野生トラ6頭の人間とのコンフリクトを回避するために、トラを捕獲して飼育場に移した。1998年には200頭いた州内の野生トラは83頭に減ってしまい、そのうちの6頭が捕獲されたのである。住民が捕獲したトラもあれば、保存館が捕獲したものもある。中には村道から10メートルしか離れていない場所に置いた罠にかかったトラもいて、トラがいかに部落の近くまでやってきているかをそれが明白に物語っている。

リアウ州の自然保護民間団体によれば、2001～02年に起こった人間とトラのコンフリクトは11件で、2002～03年が17件、その17件で人間が14人死にトラは6頭が死んだ。トラが捕獲されて健康状態が調べられるたびに、トラの身体がいかに不健康な状態にあるかが露呈する。爪や歯がみんな野生トラ本来の頑健な姿をしていないのである。

2003年10月8日、ロカンヒルル県スガイダウン村パニパハンの森に入って丸太を集めていた内のひとり18歳の青年がトラに襲われて死亡した。かれらは森に入ってキャンプしながら仕事を5日間続け、その間トラの気配がまったくなかったため、こんなことになるとは少しも思わなかったと語っている。「われわれは昔から何度も森に入って仕事してました。この森にトラがいることはもちろん承知してました。でもトラが人間に対してこんなに攻撃的になったのははじめてです。」

WWFの意見によれば、パニパハンの森に入ること自体がすでにトラの生活領域への過度の侵入を意味しているとのことだ。トラの生活領域が狭められることはトラにとって食料の減少を意味しているのである。

トラの皮や解体パーツの闇商売は衰えを知らない。はいだばかりのトラの皮は8百万ルピア、乾燥させてからトラの姿に復元させたものなら2千5百万ルピアになる。WWFインドネシア上級スタッフはトラ狩りがいかに大きな経済活動を生み出しているかについて、こう語る。

トラの骨や爪は超能力を持っていると信じられていて、特に tulang layang と呼ばれる骨を見に着けると強い力が備わり、勇気と自信が湧いてくると考えられている。そのためにこの骨は tulang berani と呼ばれている。

しかしその部分以外の骨も爪も、トラのような強さを自分にもたらしてくれると大勢の者が信じているため、トラの骨や爪の需要も小さくない。それらを加工して装飾品にしたものをつけたペンダントやブレスレットをかれらは身に着ける。

強いオスとしての姿を村人が示せば、その雄々しさを村のだれもが賞賛し、自分に一目も二目も置いてくれる。村のジャゴアンになれるのである。そのような迷信がトラを殺すことに一役買っている。言うまでもなく、皮・骨・爪・ひげなどはトラを殺さなければ手に入らないのだから。

[続く]

「スマトラトラ(5)」(2021年02月05日)

トラの骨はまた、伝統漢方医薬で重宝されているものでもある。特別な薬効があると信じられていれば、値段を高くしても売れる。中国大陸にはその巨大な潜在性があるということだろう。だからスマトラトラの骨がキロ数千米ドルで売られる。だがインドネシア国内での需要はたいしたものではないためにキロ10～15万ルピアでしか売れない。2003年のルピア対米ドルレートは8,570ルピア。

インドネシアでは、スマトラ島にしかいなくなったトラの密輸出はシンガポール・マレーシアに向けてなされてきた。中でもシンガポールが最重要拠点になっていると関係者は一様に見て

いる。そのために地理的メリットにおいて、リアウ州がシンガポール向け密輸出の表門の役割を持たされた。距離的に近いこと、多島海であって隠し場所の潜在性が高く、人の目もまばらだ。ジャンビや西スマトラなどのトラの棲息州で狩られたトラもリアウを通して国外に流れて行くのである。

かつては生きてままたトラを密輸出することも行われたが、骨ビジネスに特化するならトラが生きている必要性は皆無であり、かえってその世話や発見される可能性が高まることなどから歓迎されなくなるのは自明の理である。

リアウがトラ密輸出の表門であることが判明したのは1988年だった。それ以前に事例があったのかなかったのかは闇の中だ。1988～92年の間にインドネシアは11あるトラの骨輸出国中のトップに立った。その4年間に3,992キロのトラの骨がインドネシアから輸出されたとされている。一頭のトラが平均して8キロの骨を持っているとするなら、逆算してほぼ5百頭のスマトラトラがそのために殺されたことを意味している。トラは死して皮を遺し、トラは殺されて骨を取られるのである。

2005年9月、リアウ州プルラワンとロカンヒルルの両県で過去二カ月に三人がトラに襲われ、ひとりが死亡した。その結果、州内の2005年の死者はふたりになった。

犯人のトラは老齢で森の中での縄張り争いから追い出された者らしく、また密猟者の罠で脚に後遺障害を持っているとの推測が証言や状況から得られている。人間が森を狭めていけば、縄張り争いから脱落するトラの数が増加するのは目に見えている。

2001年から2004年までの間にリアウ州で人間がトラに襲われた事件は50件あり、27人が死亡している。トラに殺された人間のリストがこれでまた長くなったわけだ。被害者はたいてい農民・木こり・森林での作業者たちで、森林を切り拓く作業をしていて襲われた者も少なくない。トラが部落にやってきて、家畜だけを食って帰った事件はもっと多数に上っている。

ドゥマイの町からスピードボートで二時間半の距離にある島の森林を自然保護地区に指定し、野生のトラをそこに移す方針をリアウ州は数年前に定めた。スヌピスという名のその森林とテツソニー国立公園が野生トラのハビタットになったわけだが、州内に棲息している野生トラはまだ人間の生活領域に近いエリアにたくさんいて、それらを保護地区に移すのはたいへんなプロジェクトになる。

ところが、そのスヌピス森林は総面積が8万Haあるにもかかわらず、開墾が進んで森林と呼べるものは6万Haしかなく、それも周辺は既に人間の活動領域になっているために政府が自然保護地区に指定したのは2万Haを下回っている。

スヌピス森林には野生トラが53頭ほど棲んでいて、スヌピス森林の辺縁地区で人間がトラに襲われる事件も2004年だけで2件発生している。WWFインドネシアによればその島の沿岸部まで出てくるトラが9頭はおり、島の住民との接触が起こるのは避けられないだろうと見ている。[続く]

「スマトラトラ(6)」(2021年02月08日)

2007年5月初め、ブンクル州北部クタフン郡スバユル村のゴム園でトラが一頭捕獲された。このトラはムルチュブアナ社ゴム園に仕掛けられた密猟者の罠にはまっていたもので、住民がそれを4月30日に発見し、地元軍管区司令部と警察に届け出た。連絡を受けた天然資源保存館がすぐさま出動して体長ほぼ2メートル体重100キロのメスのトラを保護した。推定4歳と見られるそのトラは罠にかかったときに足の裏に怪我をし、また脱水症状を起こしていたため、弱々しい様子で檻に移され、治療を受けてから天然資源保存館のパトロールカーでおよそ80キロ離れたクリンチセブラツ Kerinci Seblat 国立公園まで5月10日の夜に運ばれた。

このトラがはまった罠は明らかにトラを捕獲するために作られたものであり、密猟者がトラを狙って行ったことは明白だった。体調が回復すれば、このトラは国立公園に放されることになる。公園内に棲息している野生のトラは200頭に満たないようだ。

2008年1月26日、西スマトラ州ブキツバリサン山岳部でおとなの男性の死体がふたつ2キロほど離れた場所で見つかった。それらの遺体が発見される前に、その地域一帯でトラによる家畜の被害がいろいろと出ていたことから、そのふたりも同じトラの被害者ではないかと推測されている。

現場を調べた天然資源保存館職員は、現場にトラの足跡があり、被害者の身体につけられた傷の様子もトラが加害者であることを十二分に推測させるものだ、と語っている。被害者は

ふたりとも片方の頬の肉がなくなり、また手の指あるいは足の指がなくなっているが、トラは殺した被害者の肉をまったく食べていない。天然資源保存館はすぐにこの殺人トラ捕獲のためのタスクフォースを出動させて対応に当たるとのことだ。

西スマトラ州では住民のイノシシ狩りが盛んで、それがブキツバリサンに棲むトラの食料不足を招いているおそれが高い。トラは食料が満ち足りているかぎり、人間の生活領域にやってくることはきわめて可能性が低いが、この現象からかれらが食料不足に追い込まれていることが想像される、と関係者は語っている。

2008年7月16日、ジャンビ市警本部に情報が入った。クリンチセブラツ国立公園の外縁森林からからトラの皮や骨を市内自宅に運んできた者がいるというタレこみに、15人ほどの捜査員が緊急出動した。13時ごろ、ジャンビ市内のコスを急襲した警察はMを逮捕した。MIは森林の保安を預かる公務員だった。その自宅で押収されたものは保存処理のなされた大きいトラの皮一枚とトラの骨一式などで、そのトラは解体されてまだ間もないものと推測された。MIはそれを誰に売ろうとしていたのかについて、黙秘している。

トラの骨は国際闇市場に流されるのが通例で、1996年には韓国でスマトラから送られたトラの骨100キロが発見され、2005年には台湾でスマトラトラの骨や頭骨など140キロが発見されている。[続く]

「スマトラトラ(7)」(2021年02月09日)

リアウ州プカンバル市で売買されているトラの解体パーツをコンパス紙が調査し報告した。2008年2月に行われた調査によって、プカンバル市内の貴金属店・骨とう品店・道端物売などでトラの解体パーツが普通に売られている状況が明らかになった。トラの歯はカキリマで一個25万ルピア、貴金属店では100～150万ルピアの値が付けられている。道端で骨とう品を売っている商人は「さっき華人の若いのが買って行ったから、あと二個しかない。貴金属店では150万だが、オレから買えば25万だ。黄金をかぶせりゃ、この値段じゃむりだがな。」と記者に語った。

この商人はトラの皮の端切れも商っている。10センチ四方の眉の皮は一枚12.5万ルピア、身体の皮は20x50センチが20万ルピアだ。「トラの牙は身に着けていると本人に威厳が出てきて、みんなが畏敬するようになる。眉の皮は持っている自信がみなぎってくる。このトラの牙は本物だぜ。陶器製じゃないよ。」その商人は床にトラの歯を叩きつけて証明して見せる。

かれが言うには、商品の仕入れはリアウとジャンビの州境でトラの調教師と名乗る男から買っているそうだ。昔は商品が潤沢だったが、最近は寂れる一方だ。しかし特別に何かを注文したいなら、その男が必ず手に入れてくれるから、オレに言えば間違いはない、とかれは宣伝した。

WWFが行った2007年末の調査でも、プカンバル市内の貴金属店でトラの歯や爪が販売されていた。もちろんメダン・ジャンビ・パレンバンなどスマトラの他の都市でも販売されているが、大っぴらに行われているのはプカンバルだけで、他の都市では隠れて行われている。リアウ州内でも、ドウリ・ドウマイ・ルガットウンビラハンなどでトラの解体パーツが売られている。プカンバル・ドウリ・ドウマイで売られているものはたいていがスヌピス森林のトラで、ルガットウンビラハンのはブキッティガプル国立公園のトラだそうだ。

ランポン州西部では、南ブキツバリサン国立公園にアチェ州南部で2007年6～11月に捕獲された野生のトラ5頭のうちの2頭(6歳と4歳の雄トラ)が手始めとして2008年7月22日に放たれた。これは政府森林省の肝いりで自然の保護と保存をモットーに行われたことだが、トラを放った森林の近くには1942年以来入植したひとびとの部落があり、地元民は地元行政を通して森林省に対し保安の確保を要請していた。

地元行政は解決案として3百戸あるその部落をもっと離れた場所に移す方針を決め、1千2百Haの土地を等価交換することを大臣が承認するよう求めているが、大臣はまだ回答を与えていない。

部落には住民への警告を記した表示板がいくつか建てられ、その中には「夜間外出しないように」「森林の奥深くに入らないように」「家畜を増やさないように」といった内容が見られた。部落内には夜間照明が増やされている。

ところがそれから二週間ほど経った8月5日ごろ、家畜のヤギやニワトリをトラに食われたという苦情が住民から届いた。トラが部落にやってきていることは明らかで、このプロジェクトを

担当している南ブキツバリサン国立公園管理館と森林警察といくつかの民間団体は警戒態勢を強化した。担当者はそれについて、部落にやってきたのは4歳のトラではないかと推測され、6歳のトラほど環境への適応がうまく進んでいないためだろうとその理由を述べている。

2頭のトラには所在探査のための発信装置がくくりつけられていて、6カ所で所在がモニターされており、4歳のトラは7月28日に住民居住地区を訪れたことがわかっている。一方、6歳のトラは住民居住地区から遠い方に生活領域を作っているとのことだ。

[続く]

「スマトラトラ(8)」(2021年02月10日)

2008年11月27日付けコンパス紙の記事によれば、スマトラトラの個体数は野生のものが400～500頭、そして動物園や飼育場に232頭いる。低地の熱帯雨林から山岳部の高地まで、マングローブ湿地や藪などを棲息環境にし、スマトラ島だけにおいて、スマトラにある11の国立公園中の9カ所に住んでいる。雌の生活領域は20平方キロだが雄の生活領域は60～100平方キロに及び、森林伐採のためにその領域が確保されないケースが増加している。野生トラは哺乳類を捕食し、一日に6～7キロの肉を必要とするが、一度に40キロを食べることができる。

スマトラトラは現存する亜種の中でもっとも小さく、体長は雄が234センチ、雌が198センチ、体重は雄136キロ、雌91キロ。雌は生涯で30頭出産し、一回の出産は1～6頭、妊娠期間は102～110日であり、毎年出産することができる。スマトラトラの雄のたてがみは世界の他の亜種よりも長い。

1998年に発表されたDNA検査の結果によれば、スマトラトラは他の大陸部のトラが持っていない遺伝子を保有しているとのことで、スマトラ島が6千～1万2千年前に大陸から切り離されたときに島内に閉じ込められ、大陸部のトラとは異なる独自の発展を経て来たことをそれが証明している。

スマトラトラも不法狩猟の犠牲になって、頭数は減少する一方だ。トラの牙・爪・皮・ひげ・骨がスマトラ島内28都市にある326カ所の動物関連アイテムを売っている販売所の10%で見

つかったことを2006年の調査結果が物語っている。それはスマトラトラが23頭殺されて解体されたことを推測させ、1999～2002年の年間推定数52頭からは減少している。

不法狩猟の範疇に属さない人間とスマトラトラの衝突は1996～2004年間に152回発生し、死者25人、重傷者数十人、千頭を超える家畜が餌食になり、百頭を超えるトラが殺された。

ジャンビの森の中でジュルトウン jelutung の樹脂を採取していた45歳の男性が2009年1月24日、住んでいる小屋の近くで遺体で発見された。住民居住地区にやってきたトラに殺されたもので、トラの生活環境内で餌がいかに減少しているかを示すものだ、とジャンビ天然資源保存館長がコメントした。

被害者はプマタンラマン村の一番外側で森林に近い土地に小屋を建てて住み、ジュルトウンの樹脂を採集するのを生計にしていた。その日の早朝まだ暗いうちに、かれは仕事をしに森に入ろうとして家を出て森に向かい、しばらく行ったところを後ろからトラに襲われたものと見られ、被害者は背中から腰にかけて爪で引き裂かれた痕があり、また首の後ろ側にトラの牙による穴があいていた。

トラがこのようなやり方で人間を襲うのはきわめて稀なことであり、まだ暗い中で動いている被害者をトラが家畜と勘違いしたのではあるまいか、と保存館長は述べている。被害者を倒した後、トラはあまり間を置かずにその場所を離れているから、それが人間だったことが分かってトラは急いで立ち去ったように思われるとのことだ。

被害者が向かった森はかつて森林利用コンセッションを得て生産活動を行っていた会社が何年も前に活動をやめたままになっている場所で、そこに棲むようになったトラがプマタンラマン村の家畜を餌食にするようになった。この村では2007年にも一度、トラによる住民の死亡事件が起こっている。天然資源保存館はそのトラを森の奥深くに追いやるためにカーバイド爆弾を使って嚇かす計画を立てている。[続く]

「スマトラトラ(9)」(2021年02月15日)

2009年2月半ばには、西スマトラ州リマプルコト県ナガリハラバンで、村からすぐそばに見

えるブキッサゴの疎林にトラが朝夕姿を現わすようになったため、地元民は恐怖の毎日過ごすようになった。2月初めごろからほとんど毎日姿を見せるようになったそのトラは体長170センチ体重150キロくらいの大物で、その間に牛が一頭、ヤギが四匹既に食われている。地元民にとってこのようなできごとは初めてであり、屋外での仕事がほとんど手につかないありさまだ。

ミナンカバウ地方ではトラに datuak という尊称を与えてこの密林の王に敬意を表しているものの、この招かざる王に生命を奪われた民衆もいる。2007年には流血の惨事が3件起こり、2008年にはそれが5件に増えた。パダン市の郊外でトラが捕獲された事件すら起こっている。

西スマトラ州パダンでは2月前半にトラの密猟師ひとりが警察に逮捕された。逮捕時にその住居でトラの皮と多数の骨が発見されている。それらの証拠品はリアウの闇市で販売する予定だったと警察は推定している。密猟師は6百万ルピアでトラ狩りを請け負っていたと警察に自供している。

2月21日にはジャンビ州ムアロジャンビ県スガイグラムで森林不法伐採者ふたりがトラに殺される事件が起きた。50歳と17歳のそのふたりはランブン州から木材伐採のためにやってきていた者で、盗伐した木をランブンに持ち帰って売る仕事を行っていた。

スガイグラムでは前月にもトラが三人を襲った事件があり、そのトラは森林警察の罠にかかって既に保護され、サルマと名付けられてジャンビ市タマンリンボ動物園に収容されている。

同じ森にトラが二頭いたとは思いがけないことだった、とジャンビ州天然資源保存館長はその事件を評した。普通、トラはひとつのテリトリーを独占するものであり、サルマが捕獲されたあとにまたトラと人間のコンフリクトがそこで起こるとはまったく予想もしなかった、との話だ。

リアウ州では2月22日夜にインドラギリヒリル県のパームヤシ農園で見張り番がトラに襲われ、背中と腿に深い傷を負った。仲間の見張り番が駆け付けて、両腕にひっかき傷を負いながらもトラを追い払い、被害者を救出したが、被害者は重体で入院している。その事件にいきり立った住民が犯人を捕まえて復讐するために罠を張り、翌日トラが一頭その罠にはまった。そしてよってたかってトラの虐殺が行われたのである。

一方2月24日にインドラギリヒリル県タンジュンパサルシンパン村でトラが三頭殺された事件が明るみに出た。三週間ほど前から家畜がトラに食われる事件が頻発し、ある住民の話に

よれば、自分はヤギを三匹食われ、隣人はニワトリ十数羽と犬を食われたそうだ。

住民はその対策を相談して、トラの捕縛罠を張ることで合意し、罠師にその作業を依頼した。2月10日に体長1.5メートルほどのトラ二頭が罠にかかり、発見したときにトラはもう死んでいた。さらに2月16日にまた一頭がかかり、それも人間が見つけたときには死んでいたそうだ。

この事件が明るみに出たのは、罠にかかった状態のトラを写真に撮った者がいて、その写真がWWFインドネシアの知るところとなり、現地調査が行われて詳細が判明したのである。自然保護民間団体は一斉に非難の声をあげた。

ある目撃者は、罠にかかったトラは発見された時まだ生きており、家畜を殺された住民が仕返しに槍で殺したのだと調査員に話したことから、問題は火勢を強めた。

トラに対する人間の復讐行動はアチェ州でも同じように行われている。アチェ州南部から西海岸にかけてはトラと人間のコンフリクト、東海岸は象と人間のコンフリクトが一般的状況だ。アチェでは過去二年間にトラに殺された人間は少なくとも8人いる。かれらはたいてい森林に隣接している農園にいて、被害を受けている。そのため人間がトラに報復するのは普通のこと、トラを罠にかけて殺し、もし子供のトラであれば個人や団体が飼うこともある。[続く]

「スマトラトラ(10)」(2021年02月16日)

森林大臣はインドラギリヒル県で起こった住民によるトラ四頭の殺りく事件を重く見て、首謀者に対する法的措置を執るよう命じた。トラの棲息地域に隣接する場所で生活している住民は、自分の立場を弁えなければならない。トラは保護されなければならない動物であり、トラが自分の棲息領域を狭められたために人間の領域に侵入してくることは当然の因果関係なのだ。家畜を殺されたのなら届け出て公的措置を仰ぐのが筋道であり、私怨を晴らすようなことをしてはならない。大臣の主旨はそのようなものだった。

2009年3月には北スマトラ州北タパヌリ県でトラが部落に侵入して家畜の豚を何頭か食ったために、住民が二輪車のブレーキワイヤーを使った木製の罠を仕掛けてトラを生け捕りにした。場所はメダンから4百キロほど離れた中部タパヌリ県との県境に近い。タパヌリ県警に事

件が通報され、州天然資源保存館が出勤して生きているトラを收容した。

北スマトラ州でのトラの人間領域への侵入は2007年に3件、2008年に4件発生しており、豚や犬が犠牲になっているが人間の死者は出ていない。

2010年3月21日23時半ごろ、ジャンビ州ブルバツ国立公園内の小屋に住んでいた25歳の青年が小屋の外でトラに襲われて死亡した。その小屋は7人のグループが建てたもので、被害者はそのひとりであり、7人はそこで盗伐を行っていたらしく、国立公園内での活動に関する届出は一切なされていなかった。

仲間の6人は被害者がトラに襲われたのを見るが早いか、全員が即座に逃走した模様だ。被害者の死体は翌朝、そこから近いムアロジャンビ県スポンジェン村の住民が発見して通報した。ジャンビ州天然資源保存館が行った現場調査によれば、被害者は小屋の外で涼んでいるときに襲われたらしく、遺体はあちこちが引き裂かれ、頭はつぶれていたようだ。

3月10日には別の被害者がトラに襲われており、21日の事件がブルバツ国立公園でこの月二度目の襲撃事件になった。最初の被害者は一命を取り留めていて、病院で治療を受けている。

ブルバツ国立公園内にはトラの調査を目的にして監視カメラが設置されており、画像は8頭が棲息していることを示している。別の場所に設置されている監視カメラの画像分析がなされたなら、頭数はもっと増加するだろう。トラの棲息領域に人間が侵入すれば襲撃が起こる確率はたいへん高いことを人間は理解しなければならない、と保存館長はコメントした。

2010年5月8日、ジャンビ州ムコムコのトゥンガン村でクリンチセブラツ国立公園のトラを狩るのを生業にしていた一族のふたりが県警察と天然資源保存館が編成したチームに逮捕された。

二カ月前からチームは本格的に密猟を行っている者があることを突き止め、その捜査を進めていた。その大物密猟者の正体が判明したのは最近で、57歳と33歳の村民ふたりが犯人であることを確信したチームが5月8日にふたりを罠にかけて現行犯逮捕した。ふたりは親族関係にあった。

ふたりはトラの通り道に罠を張って捕まえ、捕らえたトラの頭を叩き割って殺し、皮・骨・牙な

どをブンクル・パダン・リアウなどに売りさばいていた。逮捕されたとき、ふたりは長さ138センチほどのトラ皮1枚と骨や牙をブンクルの買い手に売り渡すために持っていた。トラ皮は1千万ルピアで売り渡すことになっていたそうだ。

2002年からジャンビ州が開始した密猟者密売者肅清方針で、少なくないひとびとが逮捕されている。かつてはクリンチセブラツ国立公園内に密猟者が張った罠はいつも40カ所くらいにあったが、最近では20カ所ほどに半減した。それを全滅させたときにトラが絶滅していなければよいのだが。

2011年3月3日夜、ランプン州天然資源保存館と森林警察合同チームがバンドルランプン市内のレストランで保護動物の解体パーツをレストラン客に売っていたふたりの男を逮捕した。51歳と41歳のふたりの男がそこに持って来ていた商品は、トラの皮の端切れ、象の牙で作った煙草パイプ、クジラの骨などで、トラの皮は5x7.5センチが70枚、13x13センチ9枚、また18x15センチの黒豹の皮も6枚混じっていた。[続く]

「スマトラトラ(11)」(2021年02月17日)

ランプン州保存館が2011年に摘発した類似の事件はこれで4回目になる。ランプン州には保護動物が棲息する国立公園が東と西にそれぞれあり、またスマトラ島南端でジャカルタに近い、密猟も盛んなら解体パーツ売買も盛んで、解体パーツの売買に限って言うなら、スマトラ島で一番盛んな州だと見られている。

捕まったふたりは取り調べに対し、自分たちは知り合いに頼まれて渡された品物を売っただけであり、密猟から小売りに至る経路や内情はまったく知らないと述べている。かれらは州西部にある南ブキツバリサン国立公園にほど近いタンガムスの住民で、トラと黒豹はその公園内の森林で狩られたことを推測させている。

トラの皮の売値は一枚5~30万ルピアで、売人の手数料は一枚5万ルピアだとかれらは自供しているそうだが、コンパス紙のこの記事は誤植があるのではあるまいか。

同じ3月にジャンビ州東タンジュンジャブン県アイリタムラウツ村にある住民所有のパームヤシ農園で3週間のうちにトラ2頭が高圧電線に接触して死ぬ事件が発生した。その2頭はブルバツ国立公園に棲息していたトラと見られ、雨季で多雨になっているため泥炭土が水浸しになり、トラがもっと棲息に適した環境を求めて移動しているときに高圧線に触れてしまったのではないかと州天然資源保存館は推測している。

2頭目の死は3月21日に起こり、パームヤシ農園を横断しようとした体長1.5メートル体高82センチのトラが高圧線に掛かって死んでいるのを住民が発見している。保存館側は住民に対し、保護動物がもっと死ぬ可能性が高いので、高圧線は撤去するべきだ、と呼び掛けている。

2011年4月、南スマトラ州バニユアシン県にあるスンプルヒジャウプルマイ社の産業林で作業員がふたりトラに襲われて死亡する事件が起こり、同社はヤギを餌にして鋼鉄製の罠を用意し、体重75キロの雌トラを生け捕った。このトラは同社の監視下に置かれてプトリと名付けられた。南スマトラ州天然資源保存館はプトリを安全な自然林に放すことを決め、最終的に南スマトラ州バニユアシン県スンビラン Sembilang 国立公園で8月2日、森林大臣列席のもとにプトリを自然に解き放つ式典が行われた。

スンビラン国立公園内のベテツ Betet 島は原生林に覆われた完全な無人島であり、しかも鹿やイノシシが棲息しているのでトラの食料は十分にある。野生トラの保護区としては申し分のない場所だから、利用していただけるなら歓迎すると同公園管理館は述べている。

パレンバンからスピードボートで往復10時間かかるベテツ島に大臣から関係者一同、そして報道陣が大挙押し寄せ、6千米ドルの特注GPS発信機を首に巻き付けたプトリが檻から出されて森林に走り去る10秒間を全員の眼とカメラが見守った。

10月15日、西スマトラ州パダンパリアマン県コロクリエツの森林でトラがイノシシ用の罠にかかって暴れているのが見つかり、イノシシ猟師が射殺した。トラの死骸は森から担ぎ出されて部落内の礼拝所の脇に置かれた。ところが翌朝、トラの死骸が忽然とすがたを消していたのである。

村長が住民たちに事情聴取したにも関わらず、みんな口をそろえて「誰が持って行ったのかわからない」と答えたそうだ。天然資源保存館担当員は呆れた顔で、「そんな馬鹿な話があつ

てたまるか。」とその報告に応じた。数人がかりでやっと運べるトラの死骸を誰も気付かないようにこっそり盗めるわけがない。[続く]

「スマトラトラ(12)」(2021年02月18日)

担当官が村民に聞き取りを開始したところ、トラがかかったのは鹿の罠で、トラを殺すのに手製銃3丁が使われたという話を得られた。その時撮られたビデオには、生々しい状況が映っていた。トラは耳の下を銃で撃たれ、周囲にいた村人が争ってトラのヒゲを取り合っていた。ひとびとはトラのヒゲが特殊な効果を持っていると信じている。

県警は射殺者を既につかんでいるが、死骸の盗難については何ひとつ情報が得られていない。解体パーツの闇売買の可能性についても、まだそれを云々する段階でない、と警察側はコメントしている。

民間の自然保護国際組織西スマトラ支部マネージャーは、民衆はどうしていつまでも野生動物を殺すことばかり行うのか、とその事件に関連して住民の執った行動を非難した。トラが他の動物用の罠にかかったのなら、そのままにしておいて天然資源保存館に通報するのがなすべきことではないか、とマネージャーは語っている。西スマトラ州で過去6年間に13頭が人間とのコンフリクトで殺されているとのことだ。

2012年2月24日、北ブンクル県の伐採林にトラの捕縛罠が36カ所仕掛けられているのが発見されて州天然資源保存館がそのすべてを撤去した。この罠にマレー熊とブタオ猿がかかって死に、またトラも一頭かかっていたのを救出されたが、足の指にけがをしたために指を三本切断しなければならなかった。

その罠は3～5百メートル間隔で広範囲に張られ、密猟者がトラを狙って行ったものであるのは明白だ、と保存館長は述べている。州内では過去二カ月間にトラの密猟が三件摘発されている。

2012年12月19日にリアウ州プカンバル市警は大量のトラの皮を市内自宅に置いている60歳の住民ひとりを逮捕して取り調べた。頭皮付きの完ぺきなトラの皮9枚、黒豹の皮2枚、

マレー熊の皮4枚、鹿の頭5つがその家から押収された。

その男は動物の皮の加工細工師で、壁掛けや置物にするためのオフセット制作を行っていた。かれが挙げた顧客の名前の中には州庁高官たちも混じっていた。トラは魔力を持っているとの民間伝承がいまだに信じられていて、トラの皮や爪・牙・ひげなどを持っていると持ち主にトラの力と威厳が宿るという話が語られ、トラの皮は一枚5千万ルピアの値が闇市場でついている。

2014年9月13日、ジャンビ州天然資源保存館と森林警察の合同緊急出動班がトラの密猟者と闇販売者の逮捕に向かった。逮捕された33歳の男は2歳と見られる狩ったトラの皮をはいで解体したことを自供した。皮と解体パーツはムアロジャンビに住む故買屋に売り渡す予定だったとのことだ。

森林警察によれば、故買屋は皮を1枚1千万から1.5千万ルピアで、爪や牙は30万ルピアで販売する。皮は壁飾りに、骨は医薬品材料として国外に輸出される。犯人は最長5年の入獄刑を受けることになるだろうとのことだ。ジャンビ州の野生トラは350頭ほどがクリンチセブラッやブキッティガプル、ブルバツなどの国立公園に棲息している。

2015年7月2日午前11時半ごろ、ジャンビ市内バスキ・ラツマツ通りで警察の逮捕劇が展開された。全国狙撃狩猟連盟ジャンビ支部会員のA60歳が運転する車をジャンビ市警と州天然資源保存館の合同チームが停止させたのだ。当局には既に情報が入っていた。Aはその日、市内の買い手にトラの皮をはじめとする解体パーツを1.3億ルピアで売り渡すために、ブツを自分の車に積んで買い手の家に向かう計画であるという情報が。

やってきた車を止め、Aを車外に下ろし、車内捜索が行われ、運ばれていたブツがすべて白日の下にさらされた。黒いビニールシートに包まれた体長1.5メートルのトラの皮、別のビニール袋にはトラの骨が3キロと10数個のトラの歯。[続く]

「スマトラトラ(終)」(2021年02月19日)

取調べに対してAは、そのトラは自分が狩ったものではない、と供述した。トラはスガイバハ

ル地区の森で狩られたもので、自分は退役軍人から買い取っただけだというのがその説明だった。警察は更にこの事件の捜査を継続している。ジャンビ州でこの年1～6月間に摘発されたトラの皮の闇売買は6件あり、11人が逮捕されている。その中には射撃連盟会員やブルバツ国立公園内監視ポストの職員まで含まれていた。野生トラの保護活動を行っている民間団体リーダーは、トラの解体パーツの闇売買が増加傾向にあると語る。国際市場における需要の高騰がスマトラでの違法活動を盛んにしている。トラの骨は伝統医薬品に使われるために韓国向けに送られ、またトラの皮も東アジアで人気が高い。全国狙撃狩猟連盟ジャンビ支部長は、会員には保護動物の闇売買に関わることを強く禁止しており、それに関わったなら会員資格をはく奪している、と述べている。

2016年3月7日深夜1時ごろ、北スマトラ州天然資源保存館に北タパヌリ県シラトムトガ村の村長から連絡が入り、野生のトラが住民居住地区から3キロほど離れた森林に設けられた罠にかかったことが報告された。トラは死んだので部落に運ばれたとの話に保存館側は豚肉100キロと交換するから死骸を当方に引き渡してくれと説得したが、部落民は聞く耳を持たず、トラ肉を分配して食った。村長はそれを止めることができなかった。その事件が起こる前、部落民の犬が7匹姿を消しており、トラの餌食になったことをだれもが想像した。その間、部落民は恐怖におびえる暮らしを続け、かれらはその対策として元凶を除去する動きに出た。罠をしかけたのである。3月6日に体長1.5メートルの5歳くらいと見られるトラが掛かっているのが発見されたが、そのときトラはほとんど罠から外れかかっている、逆襲を恐れた部落民が即座に射殺したというのがその顛末だそうだ。トラの肉を食うのは昔からのしきたりであり、しきたりを守るためにそれを行わなければならないのだ、という理由で部落民は豚肉100キロの話を蹴った。北スマトラ地方には恐怖を与えた者の肉を食らうことでその恐怖(あるいは憎しみか?)が中和され溶解するという考え方があり、この論理が人間に対しても適用されていたという話をわたしはかつて読んだ記憶がある。身内を殺した人間が裁判で死刑になると、その者の肉をわずかでもいいから食って怨念を溶解させたというような話だ。前の年にどこか他の部落で大勢がトラ肉を食っているシーンを写したビデオがユーチューブで流されたこともある。稀にしか起こらないがありふれた話であるこのようなできごとに引き下がる天然資源保存館ではなく、今回のシラトムトガ村の事件は徹底的に糾明して、もしも違反行為が見つかったなら厳しく法的措置を執るとコメントしている。

2017年7月に生活環境森林省が、スマトラトラの頭数が増加していることを発表した。40

0頭と言われていた頭数が600頭になっている、と言うのである。スマトラトラ保存活動2007～2017年状況調査の結果、その状況が確認されたことから、同省は胸を張ってその成果を国民に喧伝した。野生トラの棲息地はグヌンレウセル、クリンチセブラッ、ワイカンバス、ブルバッ、南ブキッバリサンなどの国立公園とクルムタンおよびブキッリンバンーブキッバリンの野生動物保護区とされている。しかしせっかく増えた野生トラが密猟者と闇取引従事者を喜ばせる結果になっては何にもならない。行政と民間団体が協力して、トラの捕縛罠一掃キャンペーンがここ数年行われている。クリンチセブラッ国立公園西部ではわずか一週間のうちに48カ所に罠が仕掛けられた。密猟者たちのおそろべき執念だろう。ジャンビ州では、このキャンペーンにからんで一年間に取調べを受けた容疑者は30人にのぼった。[完]

